

中谷和人氏の書評へのリブライ

吉田ゆか子

1 はじめに

尊敬する中谷さんにこの本を読み込み、書評していただいたこと、とても嬉しいです。書評を企画してくださった方々にも感謝申し上げます。各章の要約部分では、私が論じようとしたことが、よりの確な言葉で言い換えられている個所がいくつもあり、はっとさせられました。後半部分に述べられている中谷さんからの二つの疑問について、今できる範囲で応答してみようと思います。

2 物性について

私がこの物性という言葉で指したかったのは、ざっくりといえば「物らしさ」のことでした。物性に注目した分析は、主に仮面について行っていますが、そこには、仮面が物理的な物であるという側面に目を向けぬまま、安易にペルソナとして語ったり、化粧と同列に扱ったりする先行研究への批判があります。そのため、この物性は、テキストやイメージや意味といった抽象的な存在にはない具体性や物理的性質（重さ、固さ、可触性、可燃性など）にくわえ、人間や動物の身体ともちがう性質（命無き存在であること、外から物理的な力が加わらなければ勝手に動いたりしないこと、など）も含み込んだ言葉として使っています。こうしてやや雑多な意味を含めてしまったために、分かりにくい部分もあったかと思いました。

「物性とエージェンシーがどのように区別されるのか、あるいは物性とはエージェンシーの一つの形なのか」という疑問に答えるならば、物性はエージェンシーとは別の概念として設定したものです。ただし両者は深く関係しており、そのことは本書の論点の一つです。物性は、モノと人の間で働くエージェンシーの源泉（の一つ）となり、そのモノがどのように働くのかに大きく作用する性質でもあります。例えば、本書で述べたように、化粧と仮面は、どちらも人間の顔を変化させますが、それぞれ別の物性をもっているために、上演中の演者は、それぞれから異なる感覚や身体性や行為を引き出されます。そして、ほぼ同じ物性をもつ複数のモノ（たとえば同じ木から同時期に伐り出され同じように作られた二つの仮面）が、異なる人たちとの関係に入り、それぞれ別の「伝記的時間」を

積み上げてゆくならば、それらが人々から異なる感情や行為を引き出す（異なるエージェンシーをもつ）場合も十分考えられます。

3 「トペンについての民族誌」と「トペンとしての民族誌」

中谷さんがよせた疑問のうちの二つ目は、より答えるのが難しく、また色々と思いを刺激してくれるものでした。その疑問（というより叱咤激励？）の大筋は、「本書で描かれたトペンの世界（＝他者の世界）が、われわれの世界といかに関わるのか、そしてこの書が、人類学者としてのわれわれにどのような貢献するかについての記述が足りない」ということであろうと理解しました。十分な答えをもちあわせていないにしても、この指摘から考えたことを述べてみます。

まずはじめに、それは読者に任せてもいいのではないかと、とも思いました。私は自身が参与観察し、バリ芸能に関する先行研究を読み込み、またアルフレッド・ジェルをはじめとする人類学的な議論を参照するなかで経験した「見方や感じ方の変化」に基づいて本書を執筆しました¹。そして、見方を変化させることによっていかに新しいトペン像が立ち現われるのかを、先行研究と対比させつつ記述しました。これらが読者を触発し、それぞれの読者がトペンでない別の対象（そのなかにはその人にとっての「われわれの世界」の事象も含まれるでしょう）と対峙するときにその見方が何らかの形で影響するならばそれでよく、またそのことには豊かな可能性があるのではないかと考えます。このこととも関連しますが、自身のごく日常的な意識のなかでは、バリは私にとっての「われわれの世界」の一部を成しています。ですので、バリの人々と関わるなかで、また研究を通して、芸能上演やその伝承についての新たな視座を得たとき、やや大げさに言えば自分そして世界の一部が更新されたような感覚を得ます。「われわれの世界」と「他者の世界」とのコントラストを強調しながら、後者で育まれる独特な視点や発想力に人類学の可能性を見出すヴィヴェイロス・デ・カストロの方法からは学ぶべき多くのことがあると思います[e.g. ヴィヴェイロス・デ・カストロ 201]。しかし、それとは別に、本書は私自身の上記のような感覚とそれがもたらす喜びを原動力にして書かれたという面があり、それを文章で共有することも人類学の営みの重要な部分であると考えます。

とはいえ、トペン自体が民族誌的で人類学的な営為であるのだと言ってくれた中谷さんが「トペンとしての民族誌」という、わくわくするような表現で提示した課題について、上記のような答えで終わらせるのはもったいないとも思っています。自分がプナサール（トペンに出てくるストーリー・テラー）となって、バリの芸能世界と、例えば読者の日常世界、そして人類学者たちの議論の文脈を自在に往復し、その境界をかく乱しつつ遊び、読者と一緒により明示的に世界観や人間観を更新してゆくような民族誌がどのように可能か。簡単ではないですが、今後考えてゆきたいと思います。そして、このことが、民

1 トペンを学び、演者のはしくれとして活動する経験のなかで起きた、感じ方や考え方の変化については別稿〔吉田 2015〕を参照。

族誌という形ではなく、上演作品、あるいは展示や映像作品として可能なのか、という点にも興味がわきました。ここ数年、バリ芸能や、バリ芸能と他ジャンル（例えば日本の郷土芸能）とのコラボレーション作品の企画や上演に関わる機会を得ています。本書から立ち上がる新しいトペン像、そして私がトペンを通して見た世界の姿を、いつか上演作品として形にし、それをもとに観客と対話することができたら、などと考えをめぐらせてみました。もしもそれが実現したならば、そのときには真っ先に中谷さんに観てもらいたいです。

<参考文献>

ヴィヴェイロス・デ・カストロ、エドゥアルド 2015 『食人の形而上学——ポスト構造主義的人類学への道』 檜垣立哉・山崎吾郎訳、洛北出版。

吉田ゆか子 2015 「フィールドでの芸能修行——出来事を引き起こすことと特殊例となること」 床呂郁哉編『人はなぜフィールドへ行くのかーフィールドワークへの誘い』 東京外国語大学出版会、pp.110-131。